



孤笛の かなた

上橋菜穂子 著
新潮社

物語は「聞き耳」の能力を持った少女・小夜が「使い魔」にされた霊狐・野火を助け、後に命を狙われることになる少年・小春丸と出会うことから始まる。自らを犠牲にしてもお互いを守り抜こうとする小夜と野火。

因縁と呪いに立ち向かう彼らの選んだ結末は——？

純粋にお互いを想い合う小夜と野火の気持ちが愛おしく切なく、そして昔の日本のような情景描写が清らかで美しい和風ファンタジー。派手さはないが魔法や精霊や不思議な能力といったものが好きな人に勧めたい。

ラストは客観的にみるとハッピーエンドとは決して言えないかも知れない。だが彼らが幸せならいいではないか、と素直に思える話だった。

全体を通して淡く優しく儂いといった印象で、日常を忘れて物語の世界に浸れる本。(濱本)



スロウハイツの 神様

辻村深月 著
講談社



売り出し中の人気脚本家赤羽環と人気作家チヨダ・コーキを初めとする、同じアパートで生活を送っている七人の作家の話。

成功するか並で終わるか、才能と努力、可能性と限界、といった不明確で厳しい世界に住み苦悩する彼ら。そんな世界に住むがゆえに時に傷つけあうことも

あるが、優しさと不器用さを持った彼らが繰り広げる日常と人間関係が温かくてとても心地良い。

ライトなミステリーとして読んでも、所々にちりばめられた小さな伏線が最後に回収されるのが面白かった。そして何よりラストの環とコーキを巡るエピソードがとにかく素晴らしい。本当の愛とは自分の存在を押し付け、愛を声高に叫ぶものなんかではなく、この話のように影から見守るものであるのではないかと思った。

とにかく読後感が幸せでいっぱいになる本。(濱本)

今回は「面白い教授！」をテーマに紹介したいと思います。

人間は こんなものを 食べてきた

小泉武夫 著
日本経済出版社



面白い教授といえば「動物のお医者さん」、「もやしもん」といった大学生をテーマにした作品にほとんど登場しており、特に理系なら必須ともいえるでしょう。なぜか理系には面白い先生が多く、本も多数出版されています。今回、紹介するのは「人間はこんなものを食べてきた」(日本経済出版社)です。著者は食べ物から日本、世界の文化を研究しているらしいですが、この本では、くさやの約4倍(!)も臭い缶詰や、飲めば体からお香の香りが漂う中国で発見された古酒など珍しいものから、普段口にしているものまで幅広く紹介されています。ゲテモノのエッセイに終わらず、それぞれの国の文化と食品との関係がわかるのがよいです。(山本)



踊る腹のムシ グルメブームの 落とし穴

藤田紘一郎 著
講談社文庫

もう一つは「踊る腹のムシ グルメブームの落とし穴」。こちらは打って変わって最近の日本でのグルメブームに警告する本。シラウオの踊り食いや外で釣った魚の刺身、はては東南アジアのライ魚の刺身など日本人が食しているグルメの危険性が紹介されています。食中毒はもちろんのこと魚にいる寄生虫が危ないのだそうで、顔にこぶができたり、最悪失明したりしてしまうのだとか。この教授のユニークな所は日本海裂頭条虫(サナダムシ)などにとても愛着を示し、自分の体内で育てた経験があり、患者さんに飼うことを勧めるなど筋金入りの寄生虫好きであること。日本海裂頭条虫が体内に住み着くと花粉症、アトピーなどの症状が軽くなり、体重も落ちるといいとこだけですよ。

この2冊に関係していることは失われつつある日本の文化に注目していることでしょう。小泉武夫さんは日本の発酵食品のバラエティーの多さに、藤田紘一郎さんは寄生虫に感染した日本人が多かった時代は花粉症やアトピーなどの患者は少なかったということに注目しています。スローフードが起こってきた現在、日本の食文化を見直してはいかがでしょうか。(山本)

In Her Shoes

カーティス・ハンソン 監督
2005年（米）131分



—私たちは何度もすりむいて、
自分だけの“靴”をみつける—

容姿には自信がない 弁護士の姉マギー
と、
容姿にしか自信がない 難読症の妹ローズ

ある日2人は激しくぶつかり合い勘当同然になる。1番の理解者だった姉を失い落胆するも、祖母のところで自分の居場所を見つけ始め成長しやっと自立していくローズ。いつも自分の邪魔をするローズを憎もうとするも、できないマギー。

それぞれの痛みを真摯に見つめ、絆を深めていくストーリー展開は私たちを笑顔にしてくれます。

重苦しくなく、微笑ましい作品です。（稲村）

刑務所の中

崔洋一 監督
2002年（日）93分



—物語がないのに
面白い・・・！—

受刑者たちが、まるで親に養われていた子どもの頃のように見えて、外にいる私たちの方が羨ましくなってしまう。

たくさん食べ物が出てくるのですが、どれもありきたりで素朴なおかずやお菓子たちなのに、食に異様な執着を見せる受刑者の目を通して描かれているので、観ているこっちまでゴクッと生つばを飲んでしまう感じですよ。

ありふれた言い方ですが、何でも無い事に幸せを感じたくなったら、この作品を観ると良いと思います。

……ただ、刑罰とは何なのか、と複雑な気持ちにもなりました。（吉坂）

十二人の怒れる男

シドニー・ルメット 監督
1957年（米）96分



“たったひとり”の持つ意味は？

殺人事件の陪審員に選ばれた12人の男のうち、たった1人が裁判での証拠に疑問を抱えたことから白熱の討論が展開されます。

陪審員制度を突き詰めたシナリオと、S・ルメットによる密室サスペンスのごとき演出が出色。

また、ヘンリー・フォンダの必死の表情が忘れがたいです。S・ルメット監督の劇場映画デビュー作。

日本でも陪審員制度の導入が間近に迫ってきた。陪審員であることとはどのようなことか……緊張感を以って描かれる、陪審員の現実。（吉坂）

BLOOD DIAMOND

エドワード・ズウィック 監督
2006年（米）134分



〈自由〉〈家族〉〈真実〉
彼らはダイヤモンドに違う輝きを見た

もし結婚指輪についているダイヤモンドのために、人の命が犠牲になっているなら？少年兵はなぜ存在するのか？

アフリカ地域紛争で武器調達の資金源として不法取引される

“ブラッド・ダイヤモンド” — そのひとつのダイヤモンドに託された、全く異なる3つの願い。アフリカが現在もなお抱える問題を絶大なリアリティで力強く描き、物語は感動的なラストへと向かっていく。

私たちの知らない世界がそこにはあります。物語にはらはらするとともに、考えさせられる作品です。（稲村）